

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

―佳奈は五月の半ばのある日、学校の帰りに新しい道を見つける。そこには色とりどりのつつじが咲いており、佳奈は花をつんでは道に置き、道しるべを作ることに夢中になっていた。―

最初に音がした。私はあんまり夢中になっていたので、そのすさまじいガラガラが自分のそばに近づくまで、気づきもしなかった。ガラガラガラガラ。道路を車輪がこする音。普通の自転車なら、あんなにうるさい音はたてない。ガラガラガラ。まだ自転車に乗れないチビがつけている補助輪のひびきだった。

私はふりむいて、弟の進が、真新しい補助つき自転車で、つつじの道しるべをひいていくのをじっと見ていた。なぜか、声をたてることができなかった。

大小四つの車輪が、濃いピンクや薄いピンクや朱色の花を次々とふみつぶしていく。私は自分の胸がつぶれるような思いがした。道しるべがこわれる！

進は私に気がついた。

「あっお姉ちゃん……じゃなくて、カーナ^{*}」

彼は感心にも私をカーナと呼んだ。大きな黒目が A 光っている。進もまた、親の言いつけを破り、一人でこんなに遠くまで来ていたのだ。だいぶ心細かったところ、思いがけず私を見つけて喜んだのかもしれない。

だが、私は返事をしなかった。進は、私を手をはなし、スカートから足元にこぼれ落ちたたくさんつつじの花をまじまじと見た。

「ああ、あーあ……」

いけないんだと言おうとしたのだろうが、その前に私はおんおん泣きだしていた。

「こわしたあ、こわしたあ、進のバカあ」

弟は自転車にまたがったまま、ひどくおびえた顔をした。でも、私は彼を指さして、泣きながらどなった。

「あんたが悪いのよ。直してよ。もとおりにしてよ」

進は自転車がふみにじった花の道しるべと私の顔をかわるがわる見比べた。そして、自転車をおりると、道に散らばったつつじの花を一つ二つひろい上げて、また私を見た。

「直してよ！」

私はさけぶ。一度かんしゃく玉がはれつすると、とことん泣きさけぶのが私のくせだった。

大切な花の道しるべ。あんなきれいなものの上をどうして自転車で走ることができるのだろう。なんでこんなバカな弟がそばにいるのだろう。急に冷たく強くなった夕方の風が、車輪にひかれた花の列をいよいよバラバラにこわしていった。

私は泣きながら自転車を足でけた。進の補助つき自転車。あのいまましい新品の自転車。がしんと耳ざわりな音がして、自転車はよろめいたが、三十センチほど地面をすべっただけで、たおれなかった。

進は怒りもせず、ますます大きく目を見開いた。やがて、彼は道に散らばったつつじの花をひろい集めて、自転車のかごに入れた。つぶれた花も、無事だったものもおかまいなしにどんどんひろっている。自転車をそのままにして自分がちょこまか動きまわるため、全部の花をひろってしまうまでにはずいぶんと長い時間がかかった。

かごにぎっしり詰めこまれた明るい色の花たちは、夕ぐれの中であらゆる光として見える。私は、そのもっそりとした不気味なカタマリから目をそらした。それは、つつじでも道しるべでもなく、私のぜんぜん知らない不吉でいやなものだった。

母は、私がヒステリーをおこしたのを一目で見やぶった。わけを説明しなければならず話していくうちに、私はちょっと分が悪いなと思った。

「わざとお姉ちゃんが作ったものをこわしたんじゃないわね。意地悪したんじゃないでしょ？」

母は進に聞いた。進は大きくこっくりとうなずいた。

「お姉ちゃんにあやまったの？」

かぶりをふる。まるで言葉をどこかに置き忘れてきたみたいだ。

「ごめんなさい、は？」

母にうながされても、進はむっと押し黙っていた。自分が悪くないと思っている時の進はひどくがんこで、誰の言うこともきかない。

「きれいに咲いているお花を、そんな風にむしっちゃいけないのよ。わかってるわね」

母はそれ以上進にかまわず、今度は私に向かって言った。

「うん」

私はしぶしぶ答える。母が進の味方についているのがわかるので、おもしろくない。

「I」

「うん」

「II」

その質問に答えるのはむずかしかった。気が進まなくもあった。

「百個かな？」

私は首をひねった。

「進の自転車のかごにうんといっぱい」

母は声をはりあげた。

「だめよ！ そんなに取っちゃダメ！ お花を取ったりしたらいけないの。さあ、もうしないって約束してちょうだい」
けっきょく、私が怒られたのだった。これはおもしろくないので、母がいなくなると、私は進をめいっぱいこづいた。

「明日の朝までに、お花、もどおりにするのよ！ いい？」

「どうやるんだよ」

「自分で考えるの！」

すると、進は見たことがないほどこわい目をして、私をにらんだ。大きな黒目がちちんで白目ばかりになったように見えた。

その晩は、私が先にお風呂^{ふろ}にはいった。進とは同じ部屋を使っているが、彼はまだ、つつじの花を一階の自転車置場に放りっぱなしにしているようだった。蛍光^{けいこう}灯^{とう}がぼやぼや光る夜の自転車置場は、ずいぶんと気味の悪い場所だ。あの薄暗がりの中のつつじの花のかたまりを思い浮かべると、なんだかい気がしない。進はどうするつもりだろう、と私は考えた。それとも、どうもしないつもりかしら。

私はお風呂が好きで、とても長い時間はいつている。スポンジのアヒルを湯船にしずめたり、紙せっけんをとかしてみたり、シャンプーのあわで鏡に絵をかいたり、やることはいくらでもあるのだ。進とつつじの花のことはいつのまにか忘れていると、いきなり浴室のドアが開いた。

進だ。その時、私は薄い水色の湯船につかり、あがる前の「百数え^{ひゃくすうえ}」をやっていた。

「七十七、七十八……なあに？」

いきなり、ふぶきのように、紅色^{べに}のひらひらがふりかかってきた。一気にばあっと、私の頭をめがけて、濃いピンク、淡い^{あわ}ピンク、朱色、薄紫^{うすむらさき}、白のこまかいかけらが落ちてくる。鮮やかな色に飲みこまれて、私は一瞬息ができなくなる。つつじだ。つつじのふぶき。

進は、砂場用のバケツを空にしてしまふといかにも気分よさそうに、にやりとした。私はあっけにとられて弟を見つめた。頭から花びらをすくって手の平でなめると、つつじはだいぶおおざっぱに引きさかれていた。それにしても、やわらかい花びらをこれだけちぎるのは、ずいぶん根気のいる仕事だろう。

ドアのしまる音がして、進は姿を消した。私は、湯船に浮かんだこまかい花びらをお湯と一緒にじゃぶじゃぶすくった。それはとてもきれいだったが、こわくもあった。花が完全に死んでしまったのがわかるので、こわかったのだ。紅や朱や濃い桃色のかからは、花の血のようだ。進が花を殺してしまったと思い、私は湯船の中でみぶるいした。

A棟^{*とち}のわき道に咲きこぼれていたつつじ。その枝先の生きている花が頭に浮かんだ時、私は悪いのは自分であることに気がついた。私がむしりにとって、私がすてて、進がつぶして、進が引きさいた。でも、最初は私だ。

自転車が道しるべをひいてしまった時のショックが、あまりに大きかったため、進ひとり花をめちゃくちゃにしたような気持ちがしていた。だから、母が進よ

り私を怒るのがゆるせなかったのだ。

生きている花をつんだのは私なのに、それが美しい道しるべであるうちは、つつじが死んでいることがわからなかった。花が、自転車のかごの中の黒いかたまりになった時、かすかな悪い予感がめばえた。そして、進が花を小さなかけらに変える。血のような花ふぶきにとりまかれた今、私はすっかりおびえてすくんでしまったのだ。

自分がとてもとも残酷な気がした。明るい色の小さな花のかけらが、髪^{かみ}やはお湯の上や白いタイルの洗い場の床に散っているのを、きれいだなと思い、こわいなと思い、胸がどくどくと鳴って苦しかった。

私は本当に長いこと、お湯の中で、身を堅く^{かた}してじっとしていた。湯気が頭につまって、なんだか首がくらくらするようだった。

「ちょっと、いつまではいつてるの！」

母が私をひきずりだしにやってきた時、その力強い声に、はっとして目をみはった。しかし、母は私よりもっとはっとしたらしく、小さな悲鳴をあげたのだった。

「何？ 何よ、これ！」

色とりどりの、つつじ風呂^{ふろ}。

私はまだぼんやりとしていて、返事が頭の中に用意できなかった。母は、湯船に浮かんだつつじのかけらを手ですくいあげた。

「まあ……」

なんとも言いようがない声で、母はうめいた。

「つつじよ」

私はやっと声を出すことができた。そして、身の安全のためにつけくわえた。

「進がやったのよ」

母はお湯の中をかきまわしていたが、透明なおかしな形のかけらを、いくつか手の平にすくいあげた。それは、もちろん花びらではなかった。私はしばらく考えてみた。そして、ようやくその正体がわかった。丸めたセロテープとセメダイン^{*}のかけらだ。

③急にはのぼのおかしな気がした。進の気持ちが、そっくり理解できた。弟は私に言われたとおり、傷ついた花をもとにもどそうとがんばったのだ。彼はセロテープとセメダインを使って、破れた花びらをつなぎあわせようとした。きっと、さんざん苦労したのだろう。どうにもならなくて、頭にきて、ついに、花をばらばらにしてしまったのにちがいないのだ。

私はなんだか、ほっとしたように明るいきもちになって、湯船から、ざんぷりとあがった。

「シャワーを浴びなさい。髪にいっぱいいついてるわよ」

母が命令した。

私はくもった鏡を手でふいて、自分の姿をうつしてみた。ぬれた髪に点々とほりつく、濃いピンクや朱のつつじのかけらは、なかなか悪くないがめだった。

「ねえねえ、私、ちょっと、お姫さまみたいに見えない？」

私は、手おけで湯船のつつじをひろっている母をふりかえって言った。

「はやくしなさい。かぜをひくから」

母の声はふきげんだったが、私はもう、すっかり、物語の王女のような気分になっていて鏡の前でポーズをとってみたりした。

「五月のつつじ姫のカーナよ」

私はそんな風に宣言した。そして、シャワーの水を思いきり出すと、母がまだそこにいて、

「あらあら」

と言いながら、ぬれた頭を押さえて、つつじのかけらを集めた手おけを持ったまま、あわてて外へ出ていったのだ。

佐藤多佳子「サマータイム」より（一部、改変があります。）

* カーナ……佳奈は「木の精のような不思議な感じの名前」が欲しくなり、「カーナ」と名乗り、進にもそう呼ぶよう強制していた。

* かんしゃく玉がはれつする……ちょっとしたことにも感情を抑えきれず、激しく怒りだすこと。

* A棟……団地の棟の一つ。

* セメダイン……接着剤の一種。

問一 A に最も適する語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 不安そうに イ うれしそうに ウ かなしそうに エ げんそうに

問二 ……部a「いまましい」、b「分が悪い」の文中の意味として最も適するものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「いまましい」		b 「分が悪い」	
ア	おそろしい	ア	きまりが悪い
イ	腹立たしい	イ	タイミングが悪い
ウ	気味が悪い	ウ	不公平である
エ	うるさい	エ	不利である

問三 部①「それは、つつじでも道しるべでもなく、私のぜんぜん知らない不吉でいやなものだった」とありますが、佳奈が「不吉でいやなもの」だと思ったのはなぜですか。最も当てはまるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自転車のかごにつめこまれた花は、美しくもない黒いかたまりになっていたから。
イ 進によってつぶされた花は、性質の違うまったくの別物に変わってしまったから。
ウ 自転車のかごの中で夕日に照らされた花は、佳奈が思っていたのとは違う色をしていたから。
エ 進がひろい集めた花の中には、佳奈が道しるべにしたものとは違う花がまざっていたから。

問四 会話が成り立つように、I III に当てはまることを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア そんなに取ったの？
イ たくさん取ったの？
ウ どうやって取ったの？
エ どのくらいたくさん？

問五 部②「私は悪いのは自分であることに気がついた」とありますが、「悪いのは自分」だと気づく前の佳奈はどのような気持ちでいましたか。文中の語を使って六十字以内でまとめなさい。

問六 部③「急にはのほのおかしくなった」とありますが、このときの佳奈の気持ちの説明として最も当てはまるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 進がバラバラにした花でつつじのふぶきを作ってくれたことがわかり、うれしく思っている。
イ 進がセロテープやセメダインで花を元どおりにしようとしたことがわかり、浅はかだと思っている。
ウ 花を元どおりにするために進が必死になっていたことがわかり、ほほえましく思っている。
エ 花を殺してしまったことを進が後悔していることがわかり、いい気味だと思っている。

問七 本文の内容に合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 佳奈の母は、進がわざと道しるべをこわしたことは良くないと思いつつも、佳奈ばかりを責めた。
- イ 佳奈から花を元どおりにするよう言われた進は、佳奈に対する反抗的な気持ちをまったく見せなかった。
- ウ 進は、いつも佳奈にいじわるをされている仕返しに、つつじのふぶきをバケツいっぱい浴びせた。
- エ 最初に生きている花をつんだのが自分であったことに気づいた佳奈は、進に対して優しい気持ちになった。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

和食が好まれなくなったのは、家庭で料理することが少なくなったからかもしれません。素材を味わわせる和食は、インパクトが強いので、あまり病みつきになるものではないかもしれません。だけど、それを食べて育った人にはホッとする、くり返し食べて飽きない料理です。それは家庭で受け継がれてきたからでしょう。外食や中食は、たとえば油を多く使いクセになる強い味にしてリピート客を誘うことがよくあります。世界各国の料理があるのでバラエティが豊かで、常に新しいものが出てくる新鮮さも楽しめます。

「食の外部化率」という言葉があります。年間の食品・食料の支出金額の中で、中食・外食に頼る割合のことです。農林水産省が試算したもので、調査開始時の一九七五（昭和五十）年には二十八・四パーセントでした。それがその後急上昇し、一九九〇（平成二）年以来四十パーセント台前半を維持し、二〇一〇（平成二十二年）には四十四・七パーセントもありました。

I

学生・生徒や社会人は外食が多くなります。お昼は学校や職場にいますし、大人は食事をして仕事の話をしたりデートする。でも、ふだんのお昼は弁当という選択肢もあります。コンビニや持ち帰り弁当店がなかった昭和半ばまでは、手づくりのお弁当を持って行って食べる人が多くいました。和食には、野菜の煮つけや鮭の切り身、卵焼きなどシンプルで時間が経ってもおいしく、液ダレが少ない料理がたくさんあります。弁当をつくらない人がふえたことも、和食離れを促したかもしれません。

（中略）

女性が台所仕事から遠ざかった理由の一つは、世代間の伝達がへったことですが、もう一つの大きな理由は女性差別問題かもしれません。女性が社会に出て働き始めたとき、障害になる一つが家事でした。特にサラリーマン社会になって、男性は外で働き女性は家事・育児を任されるもの、という価値観が広がっていました。台所仕事は家事の中心にあって、しかも毎日必要になります。買いたいものも行かなければなりません。

昭和の時代はともかく、今は共働きのほうが多数派です。働きたい女性はふえましたし、働く場所もふえた。何より、収入面で女性も働く必要があります。

A、昭和の時代に、家事や育児を妻に任せっぱなしにする企業戦士となるよう男性に要求した企業は、女性が男性と対等に働く時代になっても、長時間働くことを要求します。残業、休日出勤。B、会社の都合で転勤させられることもあります。

平成になって働き続ける女性がふえても、基本的に企業は昭和のやり方を続けていますから、結婚したり子どもがいる女性も、残業を求められます。

仕事で遅くなる人が一番苦労する家事が、料理です。掃除や洗濯は毎日しなくても済みますが、食事はしなければ生きていけません。しかし、仕事が忙しいと家に食材がない、つくる時間がないという問題が起こります。

お腹は空く。子どももお腹を空かせて待っている。だから、中食なのです。惣菜や加工食品は、ちょっと炒めたり温めるだけで一品できます。並べるだけで済むものもあります。^①中食は、何より忙しい働き盛りが必要としている食品なのです。

夫と同じように働いているのに、料理の負担が自分だけにかかっている、と感じている女性はたくさんいます。^②古い価値観が自分を縛っているように思う女性が、苦手とするのが和食かもしれません。

これは私の推測ですが、和食は家父長制社会を象徴しています。男性が家長として威張っている家で、割烹着を着て何時間もかけて煮豆などをつくっているのが、昔ながらの主婦のイメージです。実際、昔の和食には保存を前提にして長い時間煮しめるものがいくつもありました。ぬか漬の世話を毎日するなど、女性を台所に縛りつけるイメージがあるのです。

昭和の時代、洋食が流行ったのは、かいがいしく和食をつくる母親や姑への反発心もあったのではないのでしょうか。その世代がつくった洋食を中心にした献立で育った人は、和食にあまりなじみがありません。つくり慣れていないと、和食は難しく面倒なものに感じます。

煮ものは経験を積むうちに、うまくなる料理です。つまり、経験がないとおいしくするのが難しい。出汁を使う料理は、出汁を引く一手間が嫌われます。戻す時間が必要な乾物類も同じです。和食の多くは時間さえあれば手間がかからないし、つくり置きもできますが、その時間がない。鮮度が命の魚は、買い置きが難しい。スーパへ寄る時間がなく、残りもので調理するときは冷凍庫の肉を使うかもしれません。

和食は基本的にあまり加工せず旬の素材を味わう料理です。野菜の煮びたし、焼き魚、だいこんやさといもなど根菜類の煮もの。いんげんのごま和えなどの和えもの。対して、日本でポピュラーになっている洋食や中華料理、エスニック料理などは、味つけの濃いものが多い。ウスターソースやケチャップの濃くてスパイシーな味、豆板醤の辛さ、濃厚なオイスターソース、うま味や香りの強いナムプラー。どれも味がはっきりしている。疲れているときは、そういうパンチのある味のほうがわかりやすい。

もしかすると、現代人の生活で危機に瀕しているのは、和食そのものではなく、少しかけ手間をかけて料理したり、旬のものをおいしいと思う心の余裕なのかもしれません。

阿古真理『和食』って何?より(一部、改変があります。)

* インパクト……強い印象。

* 家父長制社会……家族の中で父親が強い権力を持つ社会。

問一 I に入るものとして正しい文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食事の半分近くを、和食に頼っているのです。

イ 食事の半分近くを、お金を出して買ったものに頼っているのです。

ウ 世の中の半分近くの人が、和食よりも世界各国の料理を好むようになったのです。

エ 世の中の半分近くの人が、ほとんど料理をしなくなったのです。

問二 筆者は前半(中略の前)部分において、和食が好まれなくなった理由を二つ述べています。それぞれ文中の語を使って説明しなさい。

問三 A B に最も適する語を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ しかし ウ また エ なぜなら

問四 — 部①「中食は、何より忙しい働き盛りが必要としている食品なのです」とありますが、「中食」がふえた背景には、社会のどのような変化がありましたか。文中の語を使って、五十文字以内で答えなさい。

問五 — 部②「古い価値観」とありますが、それはどのような価値観ですか。文中の語を使って答えなさい。

問六 本文の内容に合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 各家庭には独自の味があるので、その味をつくり出すことは非常に難しく、和食が好まれない原因になっている。

イ 和食は基本的に素材を味わう料理であるため、繰り返し食べても飽きることがない。

ウ 和食はあまり加工することがないので、新鮮な食材さえ手に入れば、だれでもおいしく仕上げることができる。

エ 和食は長時間かけてつくるものが多く、最近では料理好きな男性が好んでつくるようになってきた。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 矢印の方向に読んで二字の熟語を作るとき、次の

1

・

2

 に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

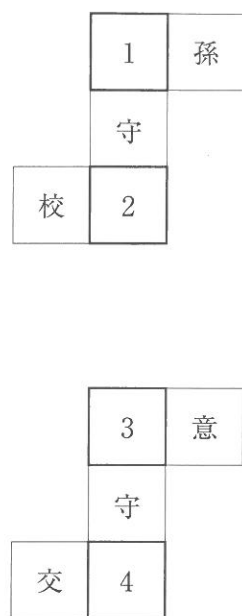


問二 たてに読むと三字の熟語、横に読むと二字の熟語となるように、次の

1

4

 に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。



四 次の1～4の漢字の、矢印で示されている太く書かれた部分は何画目に当たりますか。それぞれ数字で答えなさい。

1 世 2 布 3 博 4 論

	1
	2
	3
	4

	※ 評 点
--	--------------